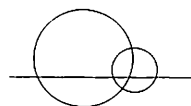


〔講演会〕



建国大学と私

満州建国大学出身、愛大25年卒 佐藤達也

【司会】 では早速ですが、最初に佐藤先生のほうからお願いします。佐藤先生は建国大学の5期生でございます。昭和18年のご入学とお聞きしています。終戦のあとそちらのほうは中途退学ということになってしまったわけですが、愛知大学に入学されまして、その後三和銀行へ入られ、都内の各分野を回られまして、その後日中貿易関係に活躍の舞台を設けられまして、日中貿易関係の会社をやっておられます。そうしましたら早速ですが佐藤先生のほうからお話を伺います。お願いいたします。

【佐藤】 ただいまご紹介にあずかりました佐藤でございます。よろしく申し上げます。足腰がいささか不自由でございますので、座らせていただきます。申し訳ございません。お手元にレジメが配布されておりますけれども、一応レジメに従いまして話します。

私は1946年12月29日、シベリアより復員をいたしまして、四日市に帰郷したんですが、翌1947年3月愛知大学の予科3年に転入学いたしました。わずか1か月でありました。その後学部のほうに入ったんですが、建国大学の同窓生は他に10名、全員で11名だったと思いますけれども、愛大にお世話になりました。うち3名は途中で退学いたしましたが、東亜同文書院の本間学長以下の方々の非常なご努力の結果、創立された愛

知大学のおかげで学業を継続することができ、感謝に堪えないことでございます。満州建国大学は敗戦と共に閉学いたしましたけれども、同大学は満州国立の最高学府として設立され、異色の大学として他に類を見ない特徴を持ち、その創立の経緯、組織、制度、目的、具体的内容等につきましてご紹介いたしたいと思っております。

1. 建国大学の創建

建国大学の創建はご承知の東亜連盟を唱えた石原莞爾氏のアジア大学構想から始まると言われております。この構想による大学設立の具体化は、昭和12年2月、関東軍の当時の参謀辻政信によって進められました。論議の末アジア大学案は建国大学案となりました。満州国はご承知のように昭和6年9月18日満州事変勃発の後、翌年3月1日に建国宣言し、首都を長春とします。3月14日長春を新京と改名。年号を大同とし、溥儀が満州国執政に就任、昭和9年3月1日帝政を実施、執政溥儀は皇帝となり、康德と改元しました。ここにおいて関東軍ならびに満州国政府は、国家の統治に当たる人材の育成を担う大学を造成する必要を感ずるに到りました。当初の構想はアジア大学として教師は世界各国の有名な学者、および若干の指導者を招聘し、学生も満州に居留する各民族の青年のみでなく、広く中国、インド、およびアジア等の国から青年を受け入れて、マルクス主義に反対するが帝国主義にも反対する、いわゆ

る満州国学を特徴とする1つの新型の大学の建設を目指しました。しかるに昭和12年7月7日、支那事変の勃発により国際情勢は一転し、アジア大学構想は受け入れられなかった。3月26日に関東軍、4月16日に国務院において建国大学創設を可決。5月上旬に準備委員会が設立され、5月2日には長春の歡喜嶺で地鎮祭を挙げて建大設立準備を着々と行ない、学生の募集、教官の確保を行ない、昭和13年5月2日、建国大学開学勅語の下賜の下に開学式、入学式を挙りました。

2. 建国大学創立の目的および内容

建国大学令の第1条には次のようにあります。「建国大学は建国精神の神髄を体得し学問の蘊奥を究め、身を以てこれを実践し、道義世界建設の先覚的指導者たる人材を養成することを目的とする」。学習年限は6年とし、前期3年、後期3年とする。前期は高等普通教育を行ない、建国精神の理論的研究と軍事訓練、労働訓練に重点を置き、第1、第2外国語の教育を行なう。後期はあとで話します。大学は大学院および研究院を設立し、前者は主として実務経験のある建大卒業生の中から招致し、造詣をさらに深めさせる。後者は主としていわゆる満州国学を研究し、政府当局が政策を定める場合に参考になる資料を提供し、また建大の教育内容を充実させるための教材の提供と建議を行なうこととする。大学総長は総理大臣張景恵がこれに当たる。副総長にはかつて武昌の湖北法制学院で教鞭をとったことがあり、中国人に対する教育の経験者であり、また東京大学法学部の卒業でありながら却って経済学博士号を取り、京都大学の経済学部長を担当したこともある作田莊一氏を最適任として選定をしました。

また教師についてはアジア大学構想によって、中国の胡適、周作人、ソ連のトロツキー、インドのガンジー、ボース、アメリカのオーエン・ラチモア、パール・バック等の人物が考えられていましたが、7・7事件後国際関係が著しく緊張し、

彼等を招聘することは困難となりました。そこで大多数の教師は日本の各大学から招聘されました。学生の募集については1938年、第1期生は150人、うち日本人75名、漢民族50人、その他25人は朝鮮、蒙古、台湾の白系ロシア人となりました。朝日新聞によると、当時日本の学生の建大受験者は約1万名であり、まことに狭き門でありました。総務長官の星野直樹が長男の正一を受験せしめ、合格入学せしめたのも彼の建大に対する重視と期待を示しております。満系の50名の学生も数千名の候補者の中から選抜された者でありました。まず母校の選抜試験を経て、県の試験を受け、合格者は合格後、省の試験を受け、合格後建国大学の国の試験の通知を受け、新京の法政大学に行き、筆記と面接試験を受けます。合格後さらに通知を受け、建大内に3泊し、日本語の面接試験と厳格な身体検査を受けます。例としてハルピン中、これは中国人の中学、200人の受験者中、合格者は4名だったということです。総理大臣の張景恵の息子も不合格となりました。

5月2日の開学式と入学式に際し、建国大学開学勅書が皇帝臨席の上、下賜されました。その中で「建国大学は国のため骨幹棟梁たる人材を養成する。本大学は我が国の最高学府であり、政治教育の根源、文化の精粹、経天地緯の学、治国平天下の道をここに教え、ここに学び、天下に及ぼして極みなし」と述べられております。建大精神として強調されたのは、まず満州国の政治、経済、文教各方面の経営管理の任に堪え得る人材を作ることであり、近代的な知識偏重教育を超えて、知行合一の精神と健全な身心を持った人材を養成することです。したがって、前期では普通の文化知識を学習し、後期ではそれぞれ分かれて政治、経済、文教を専攻した外、前期後期共に各種の訓練と東洋、西洋の倫理、道徳を学ぶことを重視しました。さらに重要なことは、各民族の学生が同じものを食べ、同じところに住み、同じものを着、同じことを学び、同じ労働をする塾生活を

送ることである。この目的は民族のあいだにある矛盾感を調和する理論と体験を会得することである。それで一番大事なことは塾生活ということになるわけですが、次に「塾生活」のことについて申し上げます。

3. 塾生活

住居は塾といい、その塾は1棟ずつの平屋であります。中間に出入口があり、片側に寝室があり、寝室の真中に通路、両側に日系・満系が交互に枕を通路に向けて寝ます。寝具は正確に4つに畳んで積み重ねる。折り目は常に正確。各自夫々少兵銃が支給される。寝室の外側に銃架があります。塾頭室もそこにある。寝室の反対側に自習室があり、20数名各自机を持っております。毎朝太鼓の音と共に起き、塾毎に養正堂という大きな武道館がありますがその前の広場に整列し、点呼を受け、あとで皇居と満州国の皇宮に遥拝をし、週1回駆け足で建国忠霊廟に参拝します。一般に午前には教室で授業、午後は武道、軍事訓練、農業訓練を受けます。農業訓練は一般的に長時間に及び、特に夏場は暑く、汗まみれになり、大変な苦闘でありました。

しかし一部には、空虚な精神論よりこの農業実習に価値を見出す者もあり、有名な馬小屋事件もありました。これは一部の日系学生が塾を飛び出し、農場の農夫と共に馬小屋に寝起きし、授業にも出ず、農業担当教授に心酔し、農作業を続けていた出来事でしたが、学校側の説得が功を奏し、1か月後に終わりました。同教授は反建国精神論者であり深く農民を愛し、満州農業を憂慮し、身をもって実践しておりました。多くの満系同窓も同教授を慕っておりました。塾生活は日系、満系を始め各民族の学生が同じものを食べ、同じ衣服を着、同じものを学習し、共同で生活行動をする中でお互いに切磋琢磨し、お互いを理解し、次第に親近感を増して、遂には友情が芽生え、一体感を得ることを目指しておりました。開学当初は日

系、満系共に新満州国の最高学府で学ぶことの高揚感があり、いかに建国精神を体得するかについて真剣に議論し合っていました。時を経るに従って戦局と国際情勢の悪化から、満系のあいだに微妙な変化が見られました。建大には研究院と図書館があつて、大量のマルクス主義を始め各種の思想関係の書物や、一部中国文の出版物が蔵書されており、全ての学生に自由に貸し出されておりました。当時の作田副総長は満州国学の完成を目指し、それを学ぶことによりマルクス主義の本を読んでも、咀嚼し批判評価できるなら構わないという姿勢でありました。学生達は自分の好みに合わせて手当たり次第本をあさり読みました。孫文の『三民主義』、蒋介石の『中国の命運』、魯迅、巴金、茅盾、ニーチェ、ゲーテ、ゴッティエの作品等、ありとあらゆる系統のものがありました。この恵まれた環境を充分に利用しようと、暇さえあれば本を読みました。次第に嗜好の合った者同士が集まり、組や班が出来上がりました。マルクス主義的な思考への入門書を始め、徐々に左傾的な書物の確保に努め、読書後討論を重ね、反満抗日の思想に陥っていく者がありました。

1941年11月9日、1名がチチハル憲兵隊に逮捕され、12月に釈放されましたが、1942年3月2日、15名が反満抗日の政治犯容疑で憲兵隊に検挙されます。彼等は憲兵隊に殴打、拷問を受けましたが、1943年4月、満州国最高法院が裁判の結果、無期懲役2名、懲役15年1名、13年2名、10年と8年が1名ずつ、5年4名、執行猶予付き5年4名の刑を言い渡しました。うち1名は入獄して間もなく精神錯乱の状態に到り、取り押さえようとした日系看守長の刀傷が元で敗血症にかかり死亡しました。他の1名は獄中で患い、医者の適当な手当てを受けられず犠牲となりました。それぞれ24歳と26歳でありました。他の者達は終戦と共に出獄しましたが、大部分は共産党と共に行動し、新中国の有用な人材として革命に

貢献しています。獄死した2名は反満抗日の先駆者として今なお建大同窓の心の中に生きております。

作田副総長はこの責任をとって辞任し、関東軍退役中将の尾高亀蔵が後任となりました。これに伴い学内の統制は厳しさを増しましたが、満系の図書館活動は逆に深行し、1、2、3期から4、5、6、7、8期と次第に引き継がれ、終戦まで続きました。1943年12月14日6名、44年3月11日3名が逮捕されましたがいずれも否認し、10月1日高等検察庁はいずれも不起訴処分とし、全員を釈放しました。その他関内、重慶、延安等に走る同窓もありましたが、地下組織との連絡方法がなかなかつかず、少数に留まりました。

4. 学内行事

次が「学内行事」であります。皇帝の親臨及び秩父、高松、三笠各宮の学内視察等の行事が多く、また勤労奉仕というのが非常に盛んに行なわれ、黒河で3週間や東寧道河で1か月やハイラル忠霊塔建設などをやっておりました。また緑地計画がありまして、学内の植樹にも相当力を入れました。現在長春の町は森林の都と言われるぐらい木がたくさん茂っておりますが、われわれが当時植樹したのもその一部にあります。またその他グライダーや騎道、柔道、剣道、合気道とか、いろいろな活動がありました。また現地実習、農村調査等は随時実施し、日系は華北、満系は日本各地という卒業旅行も当初は行なわれました。

5. 私の建国大学での体験

昭和18(1943)年2月、建大第5期日系75名は、豊橋の旧陸軍予備士官学校、現在愛知大学豊橋校舎に集合。約2週間の訓練後皇居、靖国神社、明治神宮、泉岳寺、伊勢神宮、橿原神宮、吉野の村上義光の墓、京都などを巡り神戸より乗船し、途中玄界灘で船酔いを経験した後、大連に上陸しました。旅順の二百三高地、ロシア軍の東鶏冠山

北堡壘、水師營等を見学した後、大陸を北上して遼陽の橋大隊奮戦の跡を偲び、さらに北上。真冬の新京に到着しました。2月28日です。

厳寒の満州の生活条件はまことに厳しく、零下20℃の酷寒には何とか耐えるものの、飲料水(硬水)が身体に合わず、また食事は高粱と玉蜀黍のお粥か饅頭で、消化不良になり、ずっと下痢気味でありました。武道は柔道を選びましたが、背の高い白系露人の力強い長い腕には全くお手上げでありました。学科は哲学、倫理学と精神論が多く、語学に力を入れていました。中国語は必須科目であり、私は第2外国語に英語を選びました。ロシア語を考えましたが1度に中国語とロシア語を覚えるのは大変だと思ひまして、中学時代から慣れ親しんだ英語を選んだのは良かったと思います。おかげで中国語は急速に進歩し、休日には新京旧城内に行って中国語の上海電影の映画をよく見ました。現在中国語に不自由しないのは当時発音を始め基礎を徹底したことがあると思います。また満系の同窓と共同生活で中国語を聞き、使うチャンスが多かったこともあります。向こう隣の楊君とは特に親しくなり、中国語の歌をたくさん教えてもらいました。今でも「何日君再来」とか「夜来香」なんかは歌えます。残念ながら楊君は戦後行方知れずとなりました。休日は先輩・同輩と共に親しい教授の自宅訪問をして交流を図りました。

建大から市内に出るのは徒歩で行きましたが、ここで新京の地理について若干触れますと、建大は新京駅から大同大街(現在人民大街)を真南に約10km、南湖という人造湖を右に見て、南湖大路を過ぎたところの歡喜嶺という214.5km²、いわゆる65万坪という、広大な敷地に建てられました。学生定員は最大900人で、校舎と9つの寮、養正堂など簡素なもので、樹木も少なく、敷地の大部分は原野と農地でありました。現在敷地の一部には5期陳抗(後述)始め日中同窓の努力により1985年に長春大学が創設され、15学部、学

生数約1万人の総合大学に成長しています。

大同大街は当時としては画期的な広大な道路でありまして、現在人民大街と言って、他の大都会の大通りに何ら遜色の無い機能を果たしています。当時の建物としては、日本の国会議事堂を模した旧國務院、旧満州国中央銀行、満鉄支社等数多く、そのまま使われております。旧関東軍司令部は現在中国共産党吉林省委員会が使用しております。また皇帝溥儀の住居（北京の故宮を模した本格的宮殿が完成するまでの仮住居）は、満州国皇宮博物館として観光スポットになっています。当時新京は都市計画による新市街（西側）と旧市街（東側）に分かれ、旧市街には現地中国人達が多く住み、飲食店、映画館等娯楽施設がありました。また新京駅付近の吉野町界限には日系の本屋、百貨店、飲食店などがあり、休日には建大生も大いに活用しました。1943年6月には東寧方面の道河というところに約1か月、道路建設の勤労奉仕に行きました。暑い時期で重労働でありました。冬休みには長距離直通列車で安東（現在は丹東）、平壤、京城、釜山、下関経由で三重県四日市の家に帰省しました。久しぶりに見る緑の山河に恵まれた日本の風景に大変親しさを覚えました。釜山では同期の鄭一煥チョンイーハンの、石垣の多い家を訪問しました。帰路は釜山から北京直通の列車に乗り、唐山（天津の少し北）で下車、父母のもとに帰りました。当時父は長年の農林省勤務を辞め、華北交通で農業指導を行っていました。唐山はその後大地震で町全体が崩壊しましたが、当時父は地下炭鉱の危険性を説いていました。天津、北京を父と共に旅行したのを覚えています。また青島に旅行し、青島ビール工場の横を通り、小高い丘に登り、美しい海岸の風景に見とれたのを覚えています。1944年、淋巴腺が腫れて5月頃医務室で手術をし、勤労奉仕に出かけた同窓と分かれ、療養のため天津の父母のもとに帰ります。天津北駅の鉄道病院で治療を受け、秋には回復し、建大に帰りました。10、11月頃、吉林省内の現地実習に出か

けます。親しかった凌振礼の案内で農村に行き、現地の幹部の案内で各地を視察しました。1度日本人宅に宿泊した時に、凌振礼が習慣の違いから風呂桶の底を抜いてしまったことがあり、懐かしい思い出です。帰路吉林の凌家に1泊をして、翌日帰校しました。吉林は凌家の先祖代々の郷土であり、当時凌の父親は吉林省の警察署長でありました。戦後凌振礼は共産党の吉林省の先覚分子として活躍し、吉林市、長春市の開放に貢献しました。お陰で父上も特に大きなお咎めもなく、数年前、100歳近い天寿を全うされました。また在学中私は凌振礼と親しかったに関わらず、彼が5期満系の読書班の中心人物として秘かに行動していたことには全く気づきませんでした。

戦後長春にて久闊を叙しましたが、彼等の右派闘争、文化大革命等の時代には、出自が不良という問題で大変苦労したようです。総じて建大同窓は共産党員であるにも関わらず不遇をかこつ人が多い。凌振礼は3年ほど前、夫人の故郷山東省で、趣味の農作業中突然他界しましたが、大変残念であります。現在彼の長男凌剛とは大変親しく、後述の愛大と東北師範大学との提携交渉に犬馬の労をとってもらい、大変感謝しています。彼の親友の周君を保証し、現在功成って中華料理店を東京で経営しています。彼は特級のコックです。陳抗は禁書をもって夏休みに蓋平に帰省し、いここに渡したのがばれ、蓋平の警察に逮捕されました。石田塾頭は大変心配し、瀋陽の李松林の自宅を訪問。実情を知り蓋平に赴き、保証人となり、身柄をもらい受けます。戦後陳抗は中国の廖承志事務所に着任。石田先生と会い、深い感謝の念を込めて往時を語られています。同期の杉本君も石田先生と同行しております。李松林自身も塾頭の、鍵のかかってない引出しから、禁書である毛沢東の『新民主主義論』を黙って持ち出し、リレー式に皆で書き写し、回し読みをしたことがあります。この本こそ毛沢東思想の啓発書であり、その後のマルキシズムの基礎を成したものであり、どうし

て石田先生がこのような本を引出しにしまい、鍵もかけなかったのか、皆不思議がっております。戦後李松林は大阪での同窓会終了後、石田先生と寝室を共にし、長い一夜を語り明かしたそうですが、まさに感無量であったということです。石田先生は東亜同文書院の出身で、塾頭の中で唯一、満系学生の信頼の厚い人物でありました。現在103歳です。

昭和19(1944)年秋、徴兵検査を受けて乙種合格。1945年4月、北満の山神府に入隊しました。当時は日系同期生はほとんど出征し、淋しい限りでありました。入隊後間もなく、6月には国境の山神府より嫩江に撤退し、約1か月かけて人馬共に行軍。嫩江に到着後間もなくハルピンに撤退。市内の日本人街に塹壕を掘り、ソ連軍を迎え撃つも、8月15日に終戦となり、抗戦することなく捕虜となりました。

6. シベリア収容所の生活

ハルピン競馬場で武装解除となり、牡丹江に送られました。牡丹江で約1か月過ごし、9月末鉄道貨車に乗せられて帰国すると騙され、シベリアに送られました。黒河の対岸のイズベストコーガヤ市に着いたのは10月5日、すでに大雪でありました。そこから奥地にトラックで数日間送られ、最終的にドイツ兵捕虜のいた収容所に着きました。殺伐とした森の中の収容所です。収容所生活は1日1食の黒パンと、ほとんど具の無い薄いスープを食し、道路工事、木材伐採に従事します。不衛生から虱が大量発生し、発疹チフスが蔓延し、栄養失調のため毎日死者が数名から十数名を数えました。私も1月中旬に発病し、高熱の中で、幸いにも1月25日巡回してきたソ連軍女医の診察を受け、入院しました。2月11日紀元節に当たり病院で供された赤飯の記憶がありますが、その間は夢うつつでありました。幸いにも病気は回復したが、依然として健康状態は悪く、新しい収容所で軽作業に従事しましたが、間もなく

検診の結果、皮膚をつねられ、栄養失調であり帰国と決定。8月頃汽車でナホトカまで送られました。帰国の船を待ちましたが、やがて乗船しましたら騙されて船は北朝鮮の咸興に到着。もと新日本窒素工業の社宅に泊まることになりました。畑で野菜の収穫を手伝い、帰国を待ちましたら12月20日頃、幸いにも乗船、佐世保港に上陸。帰国手続きを終わり12月29日、四日市の自宅に帰りました。父母、弟、妹もすでに天津より無事帰国しており、お互いに無事を喜び合いました。

軍隊、シベリアでの捕虜生活の思い出は、全て惨めなものでありました。何分日本軍最後の二等兵で、何事につけ上官から軽んぜられ、特にシベリアの捕虜生活でも、初めは軍隊の組織そのままでありましたので、日本軍の階級制度が残り、貴重な食糧の分配においても、班長の取り巻き連中が班長殿の分とか言って自分のものとし、平等に分配しなかったため、ソ連側に発覚。その後ソ連側が直接分配することになり、改善しました。とにかく収容所のような限界状況においては、平素の人間性のかけらもない、動物にも劣るような行動が多発し、全く地獄のような生活でありました。このたび日本国家もようやくシベリア抑留者に対する補償を行なうことを決定したようですが、すでに大部分の人達は鬼籍に入り、当時最年少だった私でさえ満84歳となり、まことに遅きに失した感があります。

7. 戦後の同窓会活動

終戦により建国大学は消滅しましたが、日中韓台蒙露等の同窓生達は、それぞれ故国に帰りました。しかし塾生活を通じ寝食を共にし、共に学び、共に働く生活のあいだ、民族共存の道が探求されましたが、政治的背景の異なる民族学生の身分ではこの矛盾は解決できなかった。しかしさらに反満学生の拉致、獄死事件も生じ、まことに苦渋の道をたどりましたが、学生達のあいだでは共同生活を通じ各自の立場を超えた友情が培われ、この

友情の絆は戦後に到り、平等互惠の原則に基づき、日中韓蒙露、各民族のあいだの積極的な交流活動をもたらしました。

戦後同窓会の発足につきましては、地方ではいろいろ動きがありましたが、全国組織の同窓会は昭和28年1月16日、虎ノ門共済会館に、教職員、学生80数名の出席を得た発起人総会を挙行しました。正式な第1回総会は29年5月2日、昭和13年5月2日の開学記念日をトして、虎ノ門共済会館において開催されました。未だ海外同窓との連絡もほとんど取れず、日本のみの同窓会として発足しましたものの、その後同窓会総会、会報、名簿等徐々に充実しました。海外では韓国、台湾に同窓会が発足し、中国は地区毎にまとも互いに連携し合ってます。彼等は日本の同窓会名簿を活用してます。まず中国同窓との交流は国民党政権の時代に若干の交流がありましたが、まだ同窓会発足以前ゆえ断片的で、個人の記憶に頼る他はありません。1955年、57年と陳抗が来日し、さらに1964年LT貿易連絡事務所秘書長として孫平化所長が来日、その後廖承志事務所の代表として着任。また国交回復以降は大使館員として、また初代札幌総領事として長年にわたって留任し、多くの同窓生と交流を深め、日中友好に大きな貢献をしました。また記述の通り日中同窓生を募り、長春大学を創立したのは見事という外はありません。題字は李鵬首相が書きました。

現在私は陳抗の子息陳燕生とコンピューターソフトの会社を、同窓3名と共に経営しておりますが、同窓の縁は子々孫々まで続いていきたいものであります。同窓会としては数多くの同窓生の子女の留学の世話をし、ビザの取得、保証人、あるいは1人毎10万円の補助、アルバイト、就職の斡旋等、各方面で役立つよう頑張っております。私個人としては、上海在住の同期生、喬世隆の息子、海光夫妻の留学の保証、大連の8期の林承棟の三女の林青の留学の保証、および同期の李孟競の娘の保証等を行ないました。喬海光とは彼が大

阪で貿易金融業の実務を取得した後、香港と共に貿易会社を設立し、後に中国の銀行が直接海外貿易金融ができるようになって、香港より上海に会社を移転しました。私は高齢のため引退しましたが、現在未だ銀行借入れの無い優良会社として喬夫人が経営をしております。海光氏は急性喘息のため死去しました。大連の林承棟は私がニチイ在職中、貿易のため大連を訪れた際、大連市秘書長として魚介類の仕入れ先の斡旋に尽力したり、また大連市にニチイの百貨店を出店するため市長との仲を取り持ったり、大変お世話になりました。一昨年大連において糖尿病のため入院中の彼を見舞ったところ、ベッドに起き上がり同窓の消息を尋ねるなど元気でありましたが、それが最後の別れとなりました。娘の林青の話では私が最後の日本の同窓生として懐かしく話をしていたとのことであります。また沈陽の華鋒（7期）、北京の高森（7期）とも貿易の関係で何度も交流をし、華鋒とは大阪で、また高森とは香港でも交流を持ちました。また台北では呉憲藏、劉英洲、ソウルでは鄭聖朝と親しく交流を深めましたが、残念ながら呉、鄭両氏は早く他界。

呉憲藏氏は台北の名士であり、台湾プラスチック、国泰百貨店、ホテル、銀行、保険、リース等の経営をしておりました。満系4期の裴定遠氏が国府軍走った兄（黄埔軍官学校卒）の行方が分からず、私に探してほしいと依頼があった時、呉憲藏氏が直ちに発見、双方に大いに感謝されたことがあります。ちなみに兄上は台北市の司令官になりました。

私は中国が改革開放政策をとって以来30年以上、毎年5、6回訪中していますが、中国は土地国有等社会主義経済の優位性を生かし、驚異的な成長を遂げ、まさにGDPで日本を凌駕しようとしています。かつては識者達はいろいろと中国の政治体制の批判をしていましたが、今や中国も資本主義体制を取り入れ、共産党は無産階級の政党ではなく、資本家を含めた全国民の代表であり、



また中国の文化、中国の生産力の代表（これを彼等は三个代表と言いますが）として、人民の大きな支持を得ております。中国同窓生と意見を交換すると、皆現政権の和諧政策に満足しております。翻って日本の政治状況を見ますとまことに慨嘆に堪えません。人材交流、日中友好活動につきましては、市川衛門（大蔵省）、林信太郎（通産省）両氏を始めとして多くの同窓が尽力しています。

8. 愛知大学と東北師範大学との提携

一昨年、現代中国学部の杭州における現地実習調査活動の報告会の際、高井同窓会長より「佐藤さん建国大学出身だなあ、明年は長春で現地実習ができるようにご努力願えんか」というお話がありました。私も第2回上海の時に出席して模様は承知しておりましたが、うっかりして申し訳ないと直ちに応諾し、交渉に取りかかりました。長春に行き、同窓生に会っていろいろと相談しますと、全員が東北師範大学の卒業生であり、強く東北師範大学を推薦してくれました。東北師範大学との交渉はとんとん拍子に進み、合作交流処と、現地実習取り決めができました。

実は1945年8月15日、終戦の時、建大同窓は大半長春に集結し、ほとんどの者は学業半ばであるので、引き続き勉強を続けたいという者が多く、卒業後祖国のために働きたいという気持ちがありました。1946年、国民党指導の下に長春大学が設立され、学生達はここに入学しました。当時長春はソ連軍の統治下にあり、国民党、共産党相方の主導権争いがありましたが、建大生のあいだでは国民党系の東北青年連盟、共産党系の新青年同盟が分裂して共に勢力の拡大に努めました。46年12月下旬、ソ連軍は長春を国民党軍に引き継ぎ、新青年同盟は共産党市工委の指示に基づき、長春を撤収して吉林に行き、東北の革命の拠点作りに努めました。長春大学も建大を始め多くの学生達が、吉林の彼等と連絡を取るようになりました。長春大学教授兼事務総長の孫亜民氏は、表向

きは国民党の長春市政府公用局長でありましたが、周恩来の命を受け、長春の地下工作に来ていたものであり、孫氏の地下工作は1948年10月、長春解放まで続きました。したがって長春が解放されるまで国府軍は共産軍に包囲されたが、長春大学の学生達は大学して吉林方面に逃れることができました。長春解放後長春大学は東北人民大学、やがて東北師範大学と改称され現在に到っていません。長春にはかつて政法、医、工、農、獣医等の大学がありましたが、その後国策によりこれを合併して吉林大学としたもので、現在は吉林大学という総合大学もあり、規模は大きいですが内容は問題があるとのことでした。

東北師範大学は、したがって建大生の卒業生が多く、谷学謙教授、宗紹英日本研究室教授はもちろん、幹事役の可人、孫克敏、陳堅氏等全て建大、師範大学の卒業生であります。膨大な図書館の日本関係の蔵書は建大を始め長春市の日本書籍を日系、満系の建大生が中心として収集し、長春大学へ運び入れたものであり、文化大革命の時は谷学謙教授が銃を持って紅衛兵からこれを守ったと言われてます。師範大学の現学長および合作交流処の朝鮮族の安副処長、共に谷学謙教授の教え子であり、話はとんとん拍子に進みました。なお東北師範大学には全中国公費対日留学生のオリエンテーション施設があり、これは日本文部省が16年前創立したものであります。以上今回の現地実習活動はきわめて順調に進み、大成功裡に発表会を終えました。まことに同窓生というのはありがたいものであります。今後愛知大学は建大の縁を通じて東北の名門東北師範大学といつそう深い提携関係を結ばれることを期待します。

9. 結語

現在、東亜同文書院大学記念センターでは東亜同文書院はじめ、大陸など外地にあった高等教育機関が愛知大学創立時母体校として如何なる影響を及ぼしたか、明らかにしようとしています。

その意味において私は建国大学および同窓会の戦前戦後の実情について時間の許す限り詳細を率直に述べさせてもらいました。

現在、私の関心事は中国同窓の子女の会と同窓会との関係です。いずれ建大同窓会は全員死去のため自然消滅は免れませんが、愛知大学同窓会において東亜同文書院の先例にならい何らかの形で引継いでもらえないかという事です。先般、子女の会の劉、陳両代表を同窓会の小崎、高井両氏に紹介しました。もう一つの願いは、この豊橋の地に建国大学同窓会有志として日中友好記念碑を建立する事です。目下、学校当局においてご高慮をいただいておりますが、早期に実現することを願っています。

建国大学の評価につきましてはいろいろですが、日本側としては大学設立の目的は達成できなかったが、他方満系の同窓生達は比較的自由的な雰囲気の中でマルクス、毛沢東等左傾書物を読みあさり、精神面、肉体面で新中国建設のために準備怠りなく、日本敗戦後は東北師範大学で新しい学問を学び、国民党を駆逐し、長年の帝国主義時代から脱した素晴らしい新中国を作ることができました。特に旧満州、現東北地区では、政、官、文教各分野において同窓生達の貢献度は際立っております。ちなみに8期生の全国人民代表会中央委員、吉林省書記、人民日報社長の高狄氏、あるいは先ほど申しました陳抗とか李孟競とか外交官、あるいは李松林など社会科学院とか、まさに建国大学はその創立目的である国家社会の棟梁たる人材の育成に成功したと言うべきではないでしょうか。

以上でございます。

【司会】 どうも佐藤先生ありがとうございました。非常に経験に裏打ちされた生々しい事例もございましたし、特に同窓会関係で戦後いろいろ活躍されて、中国側では佐藤先生の活躍が新中国にずいぶん貢献している、そういうお話を伺いまし

た。ただいまのご発表の内容に関してご質問等がございましたら少し…。いかがでしょうか。はい、どうぞ。

【参加者】 1つだけレジメに書いてあることで、中国の現状認識として「経済成長と相まって国民の共産党政権に対する支持は高い」となってるんですが、この辺のところをもうちょっと詳しくお聞かせいただければと。

【佐藤】 ご承知のように中国は社会主義ですよ。土地が国有なんです。だからここに飛行場を作ろう、ここに道路を作ろうとすれば、そこに住んでる人に、まあ補償はしますが、そういう形で非常に経済成長が早いんです。今年の春頃までは国の投資額が80%ぐらいで民間の投資が少ない。しかしながら国としては非常に成長してる。そうしますとやっぱり中国は昔の社会主義計画経済の時代と違いまして、資本主義になってるんですね。国家資本主義です。共産党は要するに資本家を含む全国民の代表だというようなことで、共産党とは言ってますけど中身はもう共産党じゃないんです。これはもう資本主義の政党です。日本よりもはるかに資本主義的な運営をしてるわけです。日本の場合にはむしろどちらかと言いますと、日教組とか、あるいは国家公務員などがありますから、非常に社会主義的な政策をやっています。向こうは厳しいんです。私が上海でやっています会社でも、とにかく何年間も給料を上げなくてまあやっていける、あまり文句も言わないというような状況で、非常に事業をやるには中国は今アメリカ以上に資本主義的な状況になってます。

そんなことで、非常に貧乏な人はまあおりますけど、それは田舎のほうです。われわれがタッチしてる都会の人なんかは生活レベルがどんどんどんどん上がってまして、GDPも最近ではもう5千ドルとかいうような数字になってます。上海なんかは1万ドルを超えています。そんなことですよ。